集合住宅の住戸平面とドライ家事等の位置変化

ライフステージによる住み方変化の研究 5

A STUDY ON LOCATION OF THE HOUSEWORK SPACES IN DWELLING UNITS

The shifts of room-alloting in relation to life stages 5

笠嶋 泰*, 今井正次**, 松本壮一郎***

Yasushi KASAJIMA, Shoji IMAI and Soichiro MATSUMOTO

This paper aims to make research on the desire of between the housework (to fold linen and to iron) spaces and LDK-planning types, a number of bedrooms in Open-zone, drawing-rooms, children's rooms and so on.

The questionnaire on 764 samples in 17 planning type, 3 LDK and 4 LDK, shows such results as follows.

The location of the housework spaces is influenced from the floor space of LDK-rooms. In many cases, the housework is chosen of next a south balcony, Japanese-style room in Open-zone. It is repulsed with children's rooms at elder life stages, and drawing-rooms through the all life stages.

Keywords : dwelling units, planning types, life stage, house work, shifts of room

住戸, 平面型, ライフステージ, ドライ家事, 位置変位

1. はじめに

本研究は、近年の住戸規模拡大傾向に伴う部屋数の増加傾向、諸室の分断化・閉鎖化傾向、定住意識に対する居住意識の変化等、住宅の内外にわたって起こりつつある変化を踏まえ、単純家族のライフステージごとの住戸内での諸行為の位置に関する多様な住要求に対応できる住戸計画の指針を得ようとするものである。

本報は、親や子供の就寝、幼児の遊び、子供の勉強、客を通す、客を宿泊させる等の行為のライフステージに伴う位置変化の法則性を考察した一連の「ライフステージによる住み方変化の研究」¹⁾における第5報目に当たるものである。

2. 目的と方法

2.1 目的

前報まででとりあげた行為のうち、ある行為はライフステージに伴いオープン域²⁾ (以下「O域」と略記) から隔離域²⁾ (同「K域」と略記) へとその行為位置を変化させること、またある行為とある行為とはライフス

テージの初期段階で両行為の位置を最も隣接する位置関係とし、またライフステージの最成長段階³⁾で両行為は最も隔たる位置関係とされること、さらにある行為は特定の居住者属性と関係しながらライフステージによりその行為位置を変化させること等の法則性のあることをみてきた。いわば、前報までで扱った行為は「ライフステージ位置変化型行為」とであると言える。

本報では、前報まででとりあげていない住戸内の生活行為の中から家事、現状では専用室として確保されることの少ない「洗濯物をたたむ・アイロン掛けを行う (以下「ドライ家事」と略記)」と、「家族が集まって話す」「夕食をする」等を取りあげ、これらの行為も前報までで扱った行為と同様、ライフステージによりその行為位置を一定の傾向をもって変化させる行為であるか否かを明らかにし、主要生活行為のライフステージに伴う行為位置に関する住要求の全体像を把握することを目的とする。

2.2 既往研究との関係

ドライ家事位置について考察した研究は、日本建築学

* 大同工業大学工学部建設工学科 助教授・工修

** 三重大学工学部建築学科 教授・工博

*** 愛知工業大学工学部建築学科 助教授

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Daido Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Mie, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Aichi Institute of Technology

図-1 対象住戸平面のO域K域

会の大会論文には散見できるが、同論文報告集には近年みられない。また同学会以外の住居関係の研究報告にもあまりみられない。わずかに、メゾネット形式の住宅を対象として余室⁴⁾の存在に着目し、「余室の使用はG系（接客等）、S系（家事等）、P系（書斎・個人のくつろぎ等）に分けられること」を報告した研究⁵⁾が挙げられる。しかし、フラット住戸を対象とし、ライフステージとの関係で、ドライ家事位置の変化の法則性を考察した論文は見い出せない。

一方、「家族が集まって話す」や「夕食をする」の位置とライフステージとの関係について考察した研究は、日本建築学会の論文報告集には見いだせないが、同学会以外の居住関係の研究報告をみると、メゾネット形式の集合住宅を対象とし、外部空間構成および外部空間での生活が住戸内生活にどのような影響を及ぼすかを主テーマとして考究された研究⁶⁾が挙げられる。この論文には、「3LDK~4LDKの住戸では、平面型にかかわらず、「家族が集まって話す」と「夕食をする」位置ともほとんどLDKとされ、両行為はLDKに定着したものと判断される」とされている。本報の「家族が集まって話す」と「夕食をする」位置の考察は、この2つの行為とライフステージとの関係を考察するものである。

2.3 研究の方法

本報も前報と同様、住み方変化の実態を平面類型別に比較分析し、ライフステージによる住み方変化が各平面類型に共通にみられるか否かにより、住み方変化の法則性を明らかにすることとする。考察対象は、本報でも家

族型Cc, B, Sを除いた単純家族とし、第1報で定義した主人別室就寝の住み方事例⁷⁾を除きかつ位置に関する住要求が相対的に現れやすい余室のある1327の住み方事例を考察対象とする。

なお、調査は自記留置式アンケート方式で、1983年、1987年、1988年に行った。この都合3回の調査のうち、接客位置に関する調査は最初の1983年調査では調査時点についてしか行っていない。このため、後述するドライ家事位置と接客位置との関係の考察は1987年調査と1988年調査とから得られた住み方事例に、1983年の調査時点の住み方事例を加えた1067の住み方事例を使用する。また、調査対象住戸の各部屋名は図-1に示すとおり「A」~「F」で、また考察対象住戸名は簡略に表現するために図中に示した略名で表すこととする。アンケート回収結果等は第1報に記したので省略する。

3. 平面型およびライフステージとドライ家事位置

本研究は、住戸内の主要行為がライフステージによりその行為位置を変化させるか否かにより、各行為の位置に対する住要求をライフステージと絡めながらとらえようとするものである。しかし、住戸内の各行為位置は住戸平面の平面的特徴に影響されることが予想される。そこで前報までと同様に本報も、AB室の規模、AB室が直接外気に接するか否か、O域内の就寝室の数とドライ家事位置との間に関係があるか否かをまず考察し、その後ライフステージとの関係をみることにする。なお、本報でもAB室の面積が20m²未満の平面型を狭小AB型

平面と、A室が直接外気に接しない平面型を行燈 AB 型平面と呼ぶこととする。

3.1 平面型とドライ家事位置

表一1は、家族型 Co・Co⁺~Cmfを対象とし、上記した平面の特徴とドライ家事位置との関係をみたものである。表の合計欄をみると、ドライ家事位置をAB室としている事例（以下、ドライ家事AB室使用と略記。また他室の場合も同様に略記する）とドライ家事C室使用（＜4堀A＞を除くC室はすべてAB室と直接つながる和室である）で大半を占める。しかし、狭小AB型平面グループ（表一1では「20m²未満」と表している）および行燈AB型平面グループではドライ家事AB室使用が合計欄と比較して少なく、かつD室使用が相当程度みられることがわかる。

図一2は考察対象住戸を狭小AB室型平面グループとそれ以外、行燈AB室型平面グループとそれ以外に分け、それぞれのドライ家事位置とライフステージとの関係をみたものである。この図をみると、ライフステージの各段階で、狭小AB室型平面グループおよび行燈AB室型平面グループの方がそれ以外の平面グループよりドライ家事AB室使用が少なく、C室およびD室の就寝室使用の多いことが分かる。

ライフステージを通じ、狭小AB室型平面グループおよび行燈AB型平面グループでドライ家事AB室使用が少ないことは、AB室の規模やA室が直接外気に接すること等がドライ家事位置の決定に少なからぬ影響を及ぼしていることをうかがわせる。

表一2は、行為位置を表す指標として、AB室、南バルコニーに面する就寝室（以下「バル就」と略記）と直接面さない就寝室（以下「非バル就」と略記）を、またAB室、和室の就寝室（以下「和就」と略記）、洋室の就寝室（同「洋就」と略記）を使い、考察対象住戸を行燈AB室型平面グループとそれ以外の平面グループとに分け、ドライ家事位置をみたものである。この表をみると、行燈AB室型平面グループでのドライ家事AB室使用は少なく、ほとんどの住み方事例が「バル就」をドライ家事位置とし、また行燈AB室型平面以外のA室が直接外気に接する平面グループではドライ家事AB室使用とドライ家事「バル就」使用で大半を占める。

行燈AB室型平面グループとそれ以外の平面グループに共通していえることは、バルコニーに面する部屋がドライ家事位置とされていることである。このことより、行燈AB室型平面グループでのドライ家事AB室使用がライフステージを通して少ないことは、AB室が行燈部屋であるためではなく、A室が直接南バルコニーに接しないために起こることを意味しているものと思われる。

また、表一2より、ドライ家事位置として和室が選択

表一1 平面の特徴とドライ家事位置

	A B室の合計面積			A B室の採光条件		○域内の就寝室数		合計								
	2 0㎡未満	20㎡以上 25㎡未満	2 5㎡以上	行燈 A B室	直外接 A B室	○域0・ 3就寝室	○域2・ 3就寝室									
A B室	19	283	141	28	427	103	350	453	34.1							
C室	35	15.0	418	46.0	68	37.4	77	40.7	32.8							
D室	39	30.7	105	11.6	53	18.0	68	37.4	128	37	14.6	180	14.9	84	14.8	
E室	11	8.7	68	7.6	4	1.4	3	1.6	81	19	7.5	65	14.8	84	14.8	
F室	0	—	0	—	2	0.8	2	0.8	0	0	—	2	6.3	2	6.3	
不明	25	19.7	58	6.4	39	13.2	17	9.3	105	17	6.7	105	9.8	122	9.2	
事例数	127	(0)	905	(134)	295	(248)	182	(34)	1145	(348)	253	(56)	1074	(324)	1327	(382)

() 内は、F室を持つ4LDKの事例数

上段：事例数 下段：%

() 内は、F室を持つ4LDKの事例数

上段：事例数 下段：%

2.1 狭小AB型平面の場合

2.2 狭小AB型平面以外の場合

2.3 行燈AB型平面の場合

2.4 行燈AB型平面以外の場合

図一2 ドライ家事位置とライフステージ

表一2 行燈AB室型平面・それ以外の平面とドライ家事位置

	A B室の採光条件				合計		A B室の採光条件				合計		
	行燈 A B室	直外接 A B室					行燈 A B室	直外接 A B室					
A B室	26		427		453		A B室	26		278		304	
バル就	138	14.3	523	38.5	661	35.1	和就	116	14.3	359	37.2	477	32.7
非バル就	3	75.8	104	47.1	107	51.2	洋就	22	63.7	35	48.0	57	51.3
不明	17	1.6	94	9.4	111	8.3	不明	17	12.1	35	4.7	57	6.1
		9.3		8.5		8.6			9.3	76	10.2	93	10.0
事例数	182		1110		1292		事例数	182		748		930	

注) 表中右者では全就寝室が「和就」である平面を除く 上段：事例数 下段：%
表中左者では全就寝室が「バル就」である平面を除く

されるか洋室が選択されるかをみると、行燈AB室型平面グループでは「和就」が、それ以外の平面グループではAB室と「和就」とで大半を占め、ドライ家事位置として就寝室を使用する場合は和室を使用する傾向のあることがうかがえる。

3.2 ドライ家事位置とライフステージ

前項の考察では、ドライ家事位置はAB室の規模およびAB室や就寝室が南バルコニーに接するか否かが大きく影響することを考察した。ここでは、狭小AB室型平面及びAB室が直接南バルコニーに接しない行燈AB室型平面を除き、かつ就寝室の中の和室が1室

以上南バルコニーに接する平面型を考察対象住戸とし、ドライ家事位置とライフステージとの関係を見ることとする。

図-3は、考察対象住戸別にドライ家事のAB室使用率をライフステージと絡めながらみたものである。3LDKでのドライ家事AB室使用とライフステージとの関係は大きく2つに分かれる。1つはドライ家事AB室使用がライフステージとともに減少するもので、南面2室型3LDK住戸がこの傾向を示す。他方は、ドライ家事AB室使用がライフステージとともに横ばいないし増大するもので、南面3室型3LDK住戸がこの傾向を示す。4LDKでのドライ家事AB室使用も2つに大別される。1つは、ドライ家事AB室使用がライフステージとともに減少傾向を示すもので、〈4池A〉〈4共B〉がこれに相当する。他方は、ドライ家事AB室使用がライフステージとともに増大し、かつライフステージの各段階で他の平面型よりドライ家事AB室使用が多いもので、〈4伝A〉〈4堀A〉がこれに相当する。3LDK、4LDKを通してみると、ドライ家事AB室使用がライフステージとともに減少するもの、横ばいあるいは増大するもの、ドライ家事AB室使用がライフステージを通じて相対的に多くかつライフステージとともに増大するものの3つに分けられる。

このうち、ライフステージとともにドライ家事AB室使用が減少する住戸に共通する平面的特徴は、〈4池A〉を除いて、AB室以外に南バルコニーに直接面する和室が1室しかないことである。また横ばいあるいは増大する傾向を示す平面型に共通する平面的特徴は、AB室以外に南バルコニーに直接接する和室が2室あることである。

仮説ではあるが、ドライ家事と同じような位置指向をもつ行為が他にあり、ドライ家事とこの行為が互いに異なる位置で行なわれる関係（以下峻別関係と略記）にあれば、南バルコニーに直接接する和室の数により、ドライ家事位置は大きく影響されることが予想される。前報までの考察で、南バルコニーに接するAB室に直接つながる和室は、親の寝室・親子の同室就寝の部屋および

接客位置とされることが多いことを報告した。以下では、こうした行為がドライ家事位置と互いに峻別される関係をもつか否かを考察することとする。

一方、ドライ家事AB室使用がライフステージを通じて相対的に多くかつライフステージとともに増大する〈4伝A〉〈4堀A〉に共通する平面的特徴は、K域内に8帖の和室をもつことである。第4報で述べたとおり、8帖の和室がある平面型では、8帖の和室をもたない平面型と比較し、接客位置をこの8帖の和室とする住み方事例が多く接客AB室使用が少なくなり、かつライフステージとともに接客8帖和室使用が多くなることを報告した。

〈4伝A〉〈4堀A〉でライフステージとともに接客AB室使用が減少することと、ライフステージとともにドライ家事AB室使用が増大することとは関係のあることが予想される。以下では、この2つの行為が互いに峻別される関係をもつか否かを考察することとする。

4. 接客位置および就寝形態とドライ家事位置

4.1 接客位置とドライ家事位置

接客位置が、K域に8帖の和室がある場合を除いて、AB室とAB室に直接つながる和室（C室）でされる傾向のあることは第4報で述べたとおりである。すなわち、接客とドライ家事とは同じような位置指向をもっていることが、前項までの考察よりうかがえた。

本項では、同じような位置に関する指向をもつ両行為に着目し、南バルコニーに接する和室の数および和室がO・K域のどちらにあるかで考察対象住戸を類型化し、各平面類型における両行為の位置をみることにする。

なお、本項での考察対象住戸も、狭小AB室型平面と行燈AB室型平面を除き、かつ就寝室の中の和室が1室以上南バルコニーに接している平面型とする。

(1) 考察対象住戸平面の類型化

考察対象住戸平面をまず直接南バルコニーに接する和室の数で分類すると、図-4のごとく、和室の1室が南バルコニーに接する平面グループ（以下バル和1室型平面と略記）と和室の2室が南バルコニーに接する平面グ

3.1 3LDK の場合

3.2 4LDK の場合

図-3 住戸平面別ドライ家事のAB室使用率の変化

名称	バルコニーに面する部屋数	O・K域内の和室の数と平面型		
		O域和室型	O・K両域和室型	K域和室型
バル和1室型	1室			
バル和2室型	2室			凡例 和:和室 2:水回り ---:オープン域 J:南バルコニー

図-4 南バルコニーに面する部屋でみた平面類型

グループ(以下バル和2室型平面と略記)とに分けられる。バル和1室型平面グループはさらに和室がすべてO域内にある平面グループ(以下O域和室型平面と略記)、O・K域の両方にある平面グループ(以下O・K両域型平面と略記)およびすべての和室がK域にある平面グループ(以下K域和室型平面と略記)とに分けられる。また、バル和2室型平面グループはO域和室型平面とO・K両域型平面とに分けられる。

(2) 平面類型別ドライ家事位置

以下、上記した平面類型別に接客位置とドライ家事位置をみるが、行為位置の指標を「AB室」「AB室+O就(AB室と、O域内のいずれかのあるいは複数の就寝室を使用している場合)」「O就(O域内のいずれかのあるいは複数の就寝室を使用している場合)」「AB室+K就(AB室と、K域内のいずれかのあるいは複数の就寝室を使用している場合)」「K就」とする。なお、就寝室がK域にしかないバル和1室-K域和室型平面での位置の指標は、「K就」を南バルコニーに接するC・D室を使用する場合の「K1就」と、南バルコニーに接しないE・F室を使用する場合の「K2就」とに分けてみることにする。

＜バル和1室-O域和室型平面＞の場合(図-5.1),

① 合計値をみると、ドライ家事O就使用とドライ家事AB室使用で大半を占める。

② 接客位置をAB室としている住み方事例では、ドライ家事O就使用が過半を占め、ドライ家事AB室使用はドライ家事O就使用と比較し著しく少ない。

＜バル和1室-O・K両域和室型平面＞の場合(図-5.2),

① 接客位置をAB室としている住み方事例では、ドライ家事AB室使用とドライ家事O就使用とで大半を占め、両者は同程度を占める。

② 接客位置をO就としている住み方事例でも、ドライ家事AB室使用とドライ家事O就使用とで大半を占めるが、ドライ家事O就使用よりドライ家事AB室使用の方が多い。

③ 接客位置をK就としている住み方事例では、ドライ家事O就使用が他の場合と比べて著しく少なく、ドライ家事AB室使用が大半を占める。

＜バル和1室-K域和室型平面＞の場合(図-5.3),

① 接客位置をAB室としている住み方事例では、ドライ家事AB室使用より、ドライ家事K1就(K域内のC・D室)使用が多い。

② 接客位置をK2就(K域内のE・F室)としている住み方事例では、ドライ家事K2就使用は皆無で、かつ、ドライ家事K1就使用よりドライ家事AB室使用が多い。

＜バル和2室-O域和室型平面＞の場合(図-5.4),

① 接客位置をAB室としている住み方事例では、ドライ家事AB室使用とドライ家事O就使用が拮抗する。

② 接客位置をO就としている住み方事例では、ドライ家事O就使用は皆無であり、ドライ家事AB室使用が多い。

③ 接客位置をK就としている住み方事例では、ドライ家事K就使用は皆無であり、接客位置をAB室およびO就としている場合とは逆に、ドライ家事O就使用が大半を占める。

＜バル和2室-O・K両域和室型平面＞の場合(図-5.5)

① 接客位置をAB室としている住み方事例では、ドライ家事AB室使用よりドライ家事O就使用の方が多い。

② 接客位置をO就としている住み方事例では、逆にドライ家事O就使用よりドライ家事AB室使用の方が多い。

5.1 バル和1室-O域和室型

5.2 バル和1室-O・K両域和室型

5.3 バル和1室-K域和室型

5.4 バル和2室-O域和室型

5.5 バル和2室-O・K両域和室型

(図-5の凡例)

図-5 平面類型別接客位置とドライ家事位置

③ 接客位置をK就としている住み方事例では、K就は南バルコニーに接しているにもかかわらず、ドライ家事K就使用は皆無であり、ドライ家事O就使用が過半を占める。

以上のことをまとめると、O域に和室のないバル和1室-K域和室型平面を除いて、ドライ家事位置はAB室とO就で大半を占め、K就が使用されることは著しく少ないこと、O・K域の両方に南バルコニーに接する和室があるバル和2室-O・K両域和室型平面においてもドライ家事AB室使用とドライ家事O就使用で大半を占めること等より、ドライ家事の位置として南バルコニーに接することや和室であることの他に、O域であることも求められているものと思われる。また、接客位置をAB室とする場合はドライ家事位置はAB室とO就が半々か、O就が多くなる傾向があること、これに対し、接客をO就とする場合はドライ家事AB室使用が多くなること等より、接客の位置とドライ家事の位置は互いに峻別される関係にあるものと思われる。

なお図は略すが、以上の傾向をライフステージでみてもおおむね同様の傾向がみられ、ドライ家事のO域指向とドライ家事位置と接客位置との互いの峻別関係はライフステージを通してみられることである。

4.2 C室の就寝形態とドライ家事位置

ここでは就寝形態とドライ家事位置との関係を見るために、ドライ家事位置とされることの多いO域内にある和室で南バルコニーに直接面するC室に着目し、C室が子供の寝室として使用されている場合、親と子供の同室就寝の部屋として使用されている場合、親の寝室として使用されている場合等により、ドライ家事位置が異なる傾向をみせるか否かをみることにする。

なお、考察対象住戸平面は前項と同様とし、またドライ家事位置の指標は、「AB室」「C室」「C室以外のO域内就寝室」「K域内就寝室」とする。

<C室が子供寝室>の場合

考察対象住戸でC室を子供の寝室として使用している住み方事例を対象にドライ家事位置をみると(図-6.1)

- ① ドライ家事AB室使用はライフステージとともに多くなる。
- ② これに対し、ドライ家事C室(子供寝室)使用は、逆にライフステージとともに少なくなる。

上記の住み方事例からAB室だけを接客位置としている住み方事例を抽出し、ドライ家事位置とライフステージとの関係を見ると(図-6.2)。

- ③ ライフステージに伴いドライ家事AB室使用の増大傾向、ドライ家事子供寝室使用の減少傾向がより顕著な形でみられる。

図を略すが、接客位置をK域の就寝室としている住み方事例を抽出し、ドライ家事位置変化をみると、

6.1 C室子供寝室使用の場合

6.2 C室子供寝室使用の場合
(接客AB室使用の場合を対象)

6.3 C室親子同室就寝使用の場合

6.4 C室親子同室就寝使用の場合
(接客AB室使用の場合を対象)

6.5 C室親寝室使用の場合

6.6 C室親寝室使用の場合
(接客AB室使用の場合を対象)

図-6 C室の就寝形態とドライ家事位置の変化

- ④ すべてのドライ家事AB室使用である。

<C室が親子同室就寝>の場合(図-6.3)。

- ① ドライ家事AB室使用がライフステージとともに多くなる。
- ② これに対し、ドライ家事C室(親子同室就寝の部屋)使用はライフステージとともに少なくなる。

上記の住み方事例から、接客位置をAB室としている住み方事例を抽出し、ドライ家事位置とライフステージの関係を見ると(図-6.4)。

- ③ ライフステージに伴い、ドライ家事AB室使用の増大傾向、ドライ家事C室(親子同室就寝の部屋)使用の減少傾向がより顕著な形でみられる。

図を略すが、接客をK域の就寝室としている住み方事例を抽出し、ドライ家事位置変化をみると、

- ④ C室を子供の寝室として使用している場合と同様、

ドライ家事位置は全例 AB 室とされる。

＜C室が親寝室＞の場合（図—6.5），

- ① ドライ家事C室（親寝室）使用が最も多く、ライフステージを通して横ばいで推移する。
- ② C室使用の次に多いドライ家事 AB 室使用もライフステージを通して横ばいで推移する。

接客を AB 室だけとしている住み方事例を抽出しドライ家事位置をみると同様の傾向を示す（図—6.6）が、接客をC室（親寝室）で行っている住み方事例を抽出してドライ家事位置をみると（図略），

- ③ ドライ家事 AB 室使用がライフステージを通してドライ家事C室（親寝室）使用を上回る。

接客位置をK域の就寝室としている住み方事例を抽出しドライ家事位置をみると（図略），

- ④ ライフステージとともにドライ家事C室（親寝室）使用が増大し、逆にドライ家事 AB 室使用が減少する。

接客 AB 室使用でかつC室が子供寝室および親子同室就寝の部屋として使用されている場合、ドライ家事位置がライフステージとともに子供寝室や親子同室就寝の部屋から AB 室に移ることは、ライフステージの初期段階ではドライ家事位置として子供寝室や親子同室就寝の部屋の使用も許されるが、ライフステージが進むと AB 室を求めるとも、あるいは子供寝室や親子同室就寝の部屋から弾き出されたとも解釈できる。

しかし、C室を親の寝室として使用している場合はライフステージを通してドライ家事位置を親の寝室としている住み方事例が多いことより、この場合の解釈は後者、すなわちライフステージの初期段階ではドライ家事位置として子供寝室や親子同室就寝の部屋の使用も許されるが、ライフステージが進むと子供の寝室や親子同室就寝の部屋からドライ家事が弾き出されるものと考えられる。

また、接客K就使用でかつC室が子供寝室および親子同室就寝の部屋として使用されている場合、ドライ家事はすべて AB 室とされている。このことは、ドライ家事の位置として接客のない AB 室が積極的に求められているとも、接客のない AB 室と子供寝室とを比較すれば AB 室の方がより選択しやすい結果とも解釈できる。しかし、C室親寝室使用の場合ドライ家事親寝室使用が全体の半分を占め、ライフステージとともにドライ家事親寝室使用が増大することは、後者すなわちドライ家事の位置として AB 室を積極的に求めているのではなく、比較すれば AB 室の方が選択しやすかったためと考えられる。

以上のことより、ドライ家事位置はC室の就寝形態に大きく左右され、特に子供寝室および親子同室就寝と互いに峻別される関係にある、いわば「峻別変化型行為」と考えられる。

なお、C室が余室とされている場合（図略）も、C室が親寝室として使用されている場合と同様、ドライ家事C室（余室）使用とドライ家事 AB 室使用はライフステージ上で横ばいで推移する。しかし、C室が余室でかつ接客 AB 室使用ではドライ家事C室使用がライフステージを通して最も多く、またC室が余室で接客C室使用ではドライ家事 AB 室使用がライフステージを通じ最も多い（図略）。このことは、接客位置がドライ家事位置に大きくかかわっていることをよく表していると考えられる。

5. 平面型およびライフステージと談笑・食事位置

5.1 平面型およびライフステージと談笑位置

表—3 は、AB 室の規模、A室が直接外気に接するか否か、O域内の就寝室の数等と「家族が集まって話す（以下「談笑位置」と略記）」との関係を、家族型 Co・Co+~Cmf を対象にみたものである。この表をみると、談笑位置は、A室が直接外気に接するか否かおよびO域内の就寝室の数等にかかわらず、大半が AB 室を使用していることがわかる。これに対し、狭小 AB 室型平面では談笑 AB 室使用は少なくなり、就寝室を談笑位置とする住み方事例が多くなる。

図—7 は、考察対象住戸を狭小 AB 型平面とそれ以外とに分け、それぞれの平面グループにおける談笑位置とライフステージとの関係をみたものである。狭小 AB 型平面以外の平面グループの談笑位置はライフステージを通してほとんどが AB 室であるのに対し、狭小 AB 型平面グループのそれは、凹凸をみせるもののライフステージを通して、相対的に AB 室使用が少なく、就寝

表—3 平面の特徴と談笑位置

	AB室の合計面積			AB室の採光条件		O域内の就寝室数		合計
	20㎡未満	20㎡以上25㎡未満	25㎡以上	行燈AB室	直外接AB室	O域0・1就寝室	O域2・3就寝室	
AB室	70	830	265	181	1004	230	835	1185
C室	12	51	2	11	54	0	85	49
D室	23	7	7	10	27	11	26	25
E室	18.1	0.7	2.3	0	5.5	2.1	4.3	1.8
F室	7	0.1	0	0	8	0.6	2.0	0.3
G室	0	0	0	0	0	0	0	0
不明	24	30	30	11	73	9	75	84
事例数	127	905	295	182	1145	253	1074	1327

上段：事例数 下段：%

7.1 狭小 AB 型平面の場合 7.2 狭小 AB 型平面以外の場合

図—7 談笑位置とライフステージ

表—4 平面の特長と食事位置

	A B室の合計面積			A B室の採光条件		O域内の就寝重数			合計
	20㎡未満	20㎡以上 25㎡未満	25㎡以上	行連 A B室	直外排 A B室	O域O・ 1就寝室	O域2・ 3就寝室		
A B室	87	848	254	170	1017	230	857	1187	
C室	68.5	93.5	88.1	93.4	88.8	90.9	89.1	89.4	
D室	1	11	0	0	12	0	12	12	0.9
E室	10	8	5	9	15	5	19	34	2.6
F室	3	0	3	4.9	8	8	0	8	0.5
不明	28	47	38	7	104	17	94	111	8.3
事例数	127	905	285	182	1145	253	1074	1327	

上段：事例数 下段：%

8.1 狭小 AB 型平面の場合

8.2 狭小 AB 型平面以外の場合

図—8 食事位置とライフステージ

室を使用している住み方事例が常に一定程度みられる。

以上のことより、AB 室の面積が一定以上であれば、談笑はライフステージを通してほとんど AB 室とされ、ライフステージによりその位置を変化させない「ライフステージ定位置型行為」と言える。

5.2 平面型およびライフステージと食事位置位置

表—4 は、談笑位置と同様の平面的特徴と「夕食をする」位置（以下食事位置と略記）との関係を談笑位置と同じ家族型を対象にみたものである。この表をみると、食事位置は A 室が直接外気に接するか否かおよび O 域内の就寝室の数等にかかわらず、大半が AB 室としている。これに対し、狭小 AB 型平面グループでは、狭小 AB 型以外の平面と比較し、食事 AB 室使用が少ないことがわかる。

図—8 は、考察対象住戸平面を狭小 AB 型平面グループとそれ以外の平面グループとに分け、それぞれの食事位置とライフステージとの関係をみたものである。狭小 AB 型以外の平面グループでの食事位置はライフステージを通してほとんどが AB 室であるのに対し、狭小 AB 型平面グループは、ライフステージを通して相対的に食事 AB 室使用が少ない。

以上のことより、AB 室の面積が一定以上であれば、食事位置はライフステージを通してほとんど AB 室とされ、ライフステージによりその位置を変化させない「ライフステージ定位置型行為」と言える。

6. まとめ

以上のことをまとめると、

① ドライ家事(洗濯物をたたむ・アイロンかけを行う)の位置に影響する平面的要因として、バルコニーに接すること、和室であること、および O 域であること等が挙げられる。

② ドライ家事位置は、接客位置と互いに峻別される関係にあることがうかがえる。また、ドライ家事位置は親寝室との間にはみられないが、子供寝室および親子同室就寝と互いに峻別される関係のあることがうかがえる。

③ これに対し、談笑(家族が集まって話す)・食事(夕食をする)位置とも、AB 室の面積が一定以上であれば、大半の事例で AB 室とされる。

目的に述べたごとく、前報までで扱った行為は「ライフステージ変化型行為」であった。これに対し、本報で扱った 3 つの行為のうちドライ家事は、バルコニーに直接接している AB 室や就寝室、和室、O 域等の位置指向をもちながら、他の行為と反発しあい、その位置を変化させる「峻別変化型行為」とであると、また談笑・食事はその位置をライフステージで変化させない「ライフステージ定位置型行為」と考えられる。

なお、「ライフステージによる住み方変化の研究 1 (本論文報告集 No 422, pp. 45~52, 1991.4)」の図—9 に誤りがありましたので、注 8 に示しましたように図を変更させていただきます。

注

- 1) 既発表論文の 3)~6) を指す。また本文中第 1, 2, 3, 4 報とはそれぞれ注 3), 4), 5), 6) を指す。
- 2) オープン域 (O 域) とは、LDK と直接つながる就寝室および LDK 自体とからなる一連の空間を指し、隔離域 (K 域) とは、LDK とは廊下等で連結され、LDK とは直接つながらない空間を指す。
- 3) 本研究では、家族型の Ck4・Cmf の段階を言う。
- 4) いわゆる nLDK 平面の n に相当する部分を就寝の場として使用しているか否かにかかわらず「就寝室」と、就寝室のうち、実際に就寝の場として使用している部屋を「寝室」と、就寝の場として使用していない部屋を「余室」と呼ぶこととする。
- 5) 鈴木成文、初見 学：住居における公室の計画、住宅建築所報、No 8, pp. 119~132, 1981
- 6) 鈴木成文、杉山茂一、服部孝生ほか：都市型低層住宅の計画設計手法に関する研究—今川・見明川団地調査を中心に—、住宅・都市整備公団調査研究期報、No 64, pp. 1~12, 1980.6
柳沢 忠、谷口 元、今井正次、笠嶋 泰、浦山益郎ほか：準接地区住宅団地の追跡調査、住宅・都市整備公団調査研究期報、No 71, pp. 72~91, 1982.8
- 7) 単純家族の住み方事例の中には、母親と子供(達)とが同室で就寝し、主人が一人で別室で就寝する事例が、Cb で 17%, Ci で 11% みられる。前報まで、この主人別室就寝型は考察対象から外しており、本報もこれに従うこととする。
- 8) 「ライフステージによる住み方変化の研究 1 (日本建築学

会計画系論文報告集, No. 422, pp. 45~52, 1991. 4)」の
図-9 に誤りがありましたので、以下の様に訂正致します。

(訂正前)

(訂正後)

図-9 4 LDK 分離比較

本論文に関する既発表論文

- 1) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: 公的空間の変転に関する研究—ライフサイクルからみた部屋構成(1)—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 35~36, 1985. 10
- 2) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: ライフステージと公的行為位置—4 LDK 住戸における住戸内生活空間の変転に関する研究③—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 223~224, 1988. 10
- 3) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: 集合住宅の住戸平面と就寝分離・分解の時期—ライフステージによる住み方変化の研究 1—, 日本建築学会計画系論文報告集, No. 422, pp. 45~52, 1991. 4
- 4) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: 寝室の位置関係からみた住戸内ゾーン概念の提案—ライフステージによる住み方変化の研究 2—, 日本建築学会計画系論文報告集, No. 428, pp. 137~145, 1991. 10
- 5) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: 幼児の遊び・子供の勉強位置とオープン域・隔離域—ライフステージによる住み方変化の研究 3—, 日本建築学会計画系論文報告集, No. 436, pp. 11~18, 1992. 6
- 6) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: 集合住宅の住戸平面と接客・宿泊位置—ライフステージによる住み方変化の研究 4—, 日本建築学会計画系論文報告集, No. 442, pp. 47~55, 1992. 12

(1992 年 11 月 10 日原稿受理, 1993 年 3 月 25 日採用決定)